

## クナシリ・メナシの戦い(一)

はじめに

寛政元年(1789)5月はじめ、飛騨屋久兵衛の請負場所であったクナシリ場所(現国後島)とキイタツ場所(現根室地方)のメナシ地方(現標津郡あたり)において、アイヌの人々が和人を襲撃する事件が起りました。原因は、アイヌの人々に対する和人側の非道な取扱いでしたが、真の原因は飛騨屋が肩代わりした松前藩の借財を回収しようとして、粕生産を導入し、アイヌの人々に対し極めて少ない手当て酷使したことにより、その反撃を招いたというものでした。

クナシリ場所が発生した

## 松前藩の出陣

この事件が松前に伝えられたのは寛政元年(1789)6月1日、翌2日には、「今度東蝦夷地騒動」があったので、その取り調べのため新井田孫三郎以下8名

和人への襲撃は、対岸のキ

イタツ場所のメナシ地方に広がり、両地の運上屋・番屋・交易船などを襲撃し、71人の和人を殺害しました。藩士は1名のみで、他は松前・南部・津軽・出羽などから来た人々で、通詞(通訳)・番人・稼方(出稼ぎ者)・水主(船員)などでした。以下、鎮撫軍の責任者、番頭の新井田孫三郎が残した「寛政蝦夷乱取調日記」(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第四巻所収)から事件を見て行きます。今回は「しらぬか(白糖)」運上屋までです。

や、鎗取・足軽・医者9名と共の者や通詞ら5名が仰せ付けられ、また、「粮米」(兵糧米)積船への乗船者ら9名と、日本語が話せるオサツハ(尾札部)長人(首長)ネチカネら4名も連れ

て行くことになりました。

6月11日〜19日の間に、4隊に分かれ「発足」し、新井田孫三郎以下8名にはそれぞれに若黨(若い侍)・小者(奉公人)や、鉄砲・弓・槍・具足櫃(甲冑を納める箱)持ちがつけました。19日には「粮米」積船が出船しました。

## 砂原から室蘭へ

陸路隊は、6月21日までに「かやべ領砂原」に全て到着しました。松前藩からの指示で、「急変」があった場合「飛脚」では「遅」くなるので、良い場所を見つけて「崎より崎え立火」(のろし)で合図することになるのとし、砂原の「小役人」にどごが良いか尋ねると、対岸の「えんとも(松輪)」

「しろひらと申處宜由」合火は当砂原砂崎が良いとだったので、その場所にすることにし、そこから「立火」が見えたら「合火を立」、城下に直ちに伝える様「小役人」に申付けました。翌22日には北風がありました

が、「鰯網船(但筒船とも言)」「七艘」ですべて乗船し昼過ぎには「えんとも」に着きました。

## 「総働勢え申渡」

「えんとも」に着いて2日目、「隊頭」から総員に対し「申渡」がありました。法令の内容は、この度の「遠夷久奈尻島騒動執鎮」のことは、「抗戦のみ」で「平均」のでは「無」く、「誠に潔白の理談」を「専」として「執鎮」る事。また、アイヌの人々に対し「少しのものたりとも売買」してはならない事や、アイヌの「長人」(首長)はもとより、「人足夷」にあっても「随分」「手当」致すべき事など、緊急派遣の目的内容と、道中でのアイヌの人々に対する接し方について示し、これに背くと厳科に処すと定められました。

ここから、「あぶた(蛇田)」と「えんとも」の「長人」ら3名も「下蝦夷地(東蝦夷地)」に「召連」れることになりました。さらに、

「立火」については「しろひら」に「拵置」ように「支配人共」へ申付けました。

## 「しらぬか」運上屋まで

6月27日には「ゆづつ(勇払)(現苫小牧市)に着き、「下蝦夷地」から来た足軽らから様子を聞き、松前藩に書状を送っています。

寛政元年に6月が2回あります。元年には「うらかわ(浦河)」すには「うらかわ(浦河)」に着き、5日に「びろつ(広尾)」に着き、9日には「しらぬか」運上屋に到着します。この間、各宿泊地で「立火」「合火」の指示をし、また、近隣アイヌの長人を呼び出し「召連」れます。さらに、「おほつない(浦幌町大津)」では、「あつけし(厚岸)」から長人ら72名、「くすり(釧路)領へつしや」から同じく13名や「しらぬか長人」らを出迎えさせ、「手印」(アイヌの人々にとって、約束の証拠となる品)を預かり、この長人たちを「しらぬか」運上屋で取り調べることとなります。